〔古今東西の首都機能都市での取組み③〕

江戸

■都市（地域）概要

・江戸時代の日本の首都。最大で 100 万人を超える規模の人口をもち、当時世界最大の都市。

■経緯・背景

・鎖国政策や幕藩体制により、基本的に限られた都市・資源を前提としていた江戸では、あらゆる資源を再利用・リサイクルする循環型社会を体現していた。

・農業国であった江戸時代の日本人は、自然（動物や山）に対する謙虚な姿勢を持ち、自分たちがコントロールできないものはできるだけ作らないようにしていた。

■内容

・太陽エネルギーは、「土」「大気」「植物」の間を常に循環しているが、江戸の人々は、その中でも「植物」から恵みを得ることを最大限に考えていた。

・「植物」は１～２年サイクルで太陽エネルギーの恵みを受け取り、作物や酸素を生産する天然のリサイクル工場であり、この意味で江戸は「植物国家」「リサイクル国家」であったといえる。

・大きなリサイクル（太陽エネルギーの循環）と、小さなリサイクル（人の手によるリサイクル循環）が、江戸ではうまくかみ合っており、産業廃棄物も増えず、資源を減らさず、大気や水の汚染もほとんど発生しない芸術的なリサイクル国家でたった。

■取組みの具体例等

・夜間照明は「なたね油」か「蝋燭」
⇒なたね油も蝋燭も原材料は植物であり、再生、再利用が可能なエネルギー資源

・米の徹底活用
⇒米生産時に発生する藁は、日用品（編み笠、蓑、藁ぞうり、わらじ等）、堆肥、厩肥、燃料とあらゆるものに再利用されており、最終的には全て大地に戻し、循環系を形成していた

・竹の活用
⇒成長が早く、廃棄後は土に返る竹を積極的に活用することで、環境にも人にもやさしい“エコマテリアル”製品を生み出していた。

・食べ物は「肥料の原料」
⇒人口 120 万人時の江戸は、一日あたり 1400ｋｌの下肥を、「下肥問屋」「下肥小売商」により、肥料として流通させていた。

・リサイクルの産業化
⇒リサイクルに関する以下のような多種多様な業種が存在していた。

＜修理・再生専門＞

・瀬戸物の焼き接ぎ/下駄の歯入れ/桶、樽の修理/鏡研ぎ/研ぎ屋　等

＜回収専門＞

・紙くず買い/紙くず拾い/古着屋/傘の古骨買/湯屋の木拾い（燃料節約のため）/古樽買/行灯の仕替え/蝋燭の流れ買い/生ゴミ回収/肥え汲み/灰買い　等

（以上、石川英輔「大江戸リサイクル事情」講談社　を基に㈱エックス都市研究所作成）